音楽とイメージ（２）

～曲の楽器編成と音楽スタイルにおける比較～

星野 悦子

（上野学園大学 音楽学部）

キーワード：音楽聴取、イメージ、テキストマイニング

Music and Imagery (2): Effects of musical instrument and musical style.

Etsuko HOSHINO

(Ueno Gakuen University)

Key Words: music listening, imagery, text mining

目 的

音楽聴取により、何らかの心像やイメージが喚起することは経験的に知られる。星野（2011）は、モンティ作曲「チャルダッシュ」を異なる楽器編成および同一楽器での異なる演奏の計3曲を聴取させ、その間に喚起したイメージの自由記述を求め、テキストマイニング手法によって分析・比較した。多次元尺度解析の結果、「チャルダッシュ」のイメージには3曲に共通の成分(官能性、回想性、夜・闇、音とテンポの激しさ、踊り)と共に、曲ごとに異なる成分も見出された。また、それらの成分を通して共通に、ストーリー性、活動性、音楽カテゴリー性、感情性の側面が認められた。今回は、(1)同一曲でも楽器編成によって異なる成分が見出されるのか、(2)同一楽器・同一演奏家であっても音楽様式(スタイル)が異なればイメージの量・質に違いはみられるのか、に着目して検討した。

方 法

刺激：以下の4つの楽曲を用いた。

- ① 「ユーモレスク」(ドヴォルザーク作曲) 木管五重奏(演奏：合奏団「織笛」) ～3'04"
- ② 「ユーモレスク」(ドヴォルザーク作曲) ヴァイオリン独奏(演奏：ヨゼフ・スーク) ～3'04"
- ③ 「クーラント」(J.S. バッハ作曲) ピアノ独奏(演奏：M. ホルショフスキ) ～2'05"
- ④ 「雪は踊っている」(ドビュッシー作曲) ピアノ独奏(演奏：M. ホルショフスキ) ～2'46"

参加者：音楽を専攻する女子大学生30名(年齢範囲：19歳～23歳、平均：20.37歳)

手続き：集団実験である。参加者は静かな教室で4種の演奏をMDプレーヤーから通常の音楽鑑賞時の音量で提示された。ただし、①と②が同じ曲であるための影響を考慮し、①と③、1週間の間隔を置いて②と④が対にされて2曲ずつ提示された。参加者は、音楽を聴きながら、感じたこと・思い浮かんだことなどイメージしたことを単語・短い文章でできるだけ多く用紙に書きだすよう求められた。目的(1)については、「ユーモレスク」の①と②のイメージを比較した。目的(2)については、バロック様式のバッハ③と印象主義様式のドビュッシー④の作品のイメージを比較した。

結 果 と 考 察

自由記述された言語データの質的データ解析は専用解析ソフトWordMinerを用い、テキストマイニング手法で分析した。テキスト型データを「分かち書き構成要素」に分解し、単語データはそのまま、文章型データからは助詞、句読点、などを除いて構成要素を整理した。同種の単語を一つの単語に置き換えることも行なった(例：踊り、ダンスを「踊り」に置き換えて統一する)。得られた構成要素のうち、頻度2以上のものを対象に対応分析とクラスタ分析を実施した。

(1) 楽器編成の異なる「ユーモレスク」2曲の比較

まず、木管五重奏の演奏バージョン(以降、木管五重奏版)とヴ

ァイオリン独奏バージョン(以降、ヴァイオリン版)の頻度2以上の分析対象となった構成要素数では64対67と差はなかったが、頻度3以上の構成要素数は木管五重奏版で35、ヴァイオリン版で24と後者の方がイメージの種類はより少なく凝縮された。曲ごとの対応分析の際に抽出された15の成分の累積寄与率は、木管五重奏版で78.99%、ヴァイオリン版で74.71%であった。得られた成分スコアをもとにクラスタ分析を行い、構成要素の類型化を試み、各クラスタの特徴から楽曲イメージを構成する概念を導き出した。その結果、それぞれ8つのクラスタに分類された(表1)。

表1 「ユーモレスク」構成要素クラスタ分析の結果

クラスタ番号	木管五重奏版	ヴァイオリン版
クラスタ 1	かわいい踊り	踊り・劇的な動き
クラスタ 2	軽快なアンサンブル	円熟と華麗さ
クラスタ 3	田舎のゆったりした癒し	別離のストーリー
クラスタ 4	自然ののどかさと変化	安らぎの大自然
クラスタ 5	迷子の子供	弦の奏法と音楽美
クラスタ 6	陽気な野原	演奏する人
クラスタ 7	のんびりした回想	懐かしさ
クラスタ 8	花と森	花園と家族

この曲はどちらの演奏からも「踊り(動き)」「自然(界・物)」「ノスタルジー(回想)」のイメージが共通していた。しかし、木管五重奏版では「安らぎ感」が、ヴァイオリン版では「劇的で華麗な」イメージが特徴的に出現した(下線部)。これは「ユーモレスク」とは異なる曲を用いた星野(2011)と同様の結果であり、楽器の音色と編成が一定のイメージ喚起に与える影響が示された。

(2) 音楽様式の異なる2つのピアノ曲の比較

同じピアノ独奏曲であるが音楽様式の異なった2曲を、上と同様の手法で分析した。バロック様式の「クーラント」では46、印象主義の「雪は踊っている」では56の構成要素(頻度2以上)がそれぞれ整理され、対応分析を施された。曲ごとの対応分析の際に抽出された15の成分の累積寄与率は、バロック版で84.87%、印象主義版で82.20%であった。得られた成分スコアをもとにクラスタ分析を行い、各クラスタの特徴から楽曲イメージを構成する概念を導き出した。その結果、それぞれ7つのクラスタに分類された。バロック版からは、「曲の特徴」「苦悩」「遁走」「運動」「重み」「光と闇」「走る」のイメージが抽出された。印象主義版では「光と闇」「ピアノ」「幻想神秘」「天上」「雨と滴」「大自然の動き」「奏法と響き」のイメージが抽出された。「光と闇」は二つに共通であったが、バッハのクーラントからは速い動きといった抽象的な活動性(回答者の63.3%)が、ドビュッシーからは雨や水に関する具体的なイメージ(回答者の73.3%)が、固有に高い割合で喚起されていた。

引用文献

星野悦子(2011) 音楽とイメージ：「チャルダッシュ」の聴取から喚起されるイメージの検討。日本心理学会第75回大会論文集、577。